

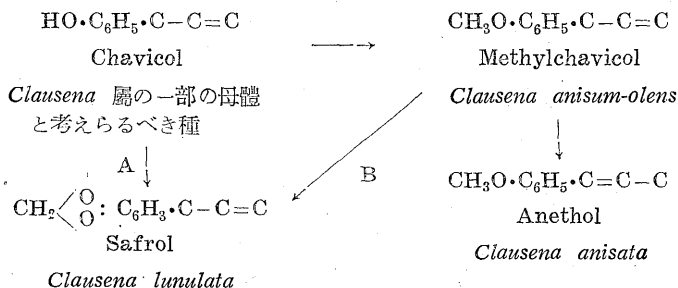
藤田 安二*: *Clausena lunulata* Hay. と *C. anisum-olens* Merr. との関係

Yasuji FUJITA*: *Clausena lunulata* Hay. and *C. anisum-olens* Merr. A chemical and ethnological note.

芸香科のワンプ属 (*Clausena* Burm.) は現在約 25 種、そのうち約 20 種が亜細亜のモンスン地帯に、他の 4 種が熱帯アフリカに産する。¹⁾

これ等のうち *Clausena lunulata* Hay. は台湾南部恒春半島に特有なる小喬木であつて、葉の精油は Safrol 約 82% を含有する。²⁾ これに近似なる *Clausena anisum-olens* (Blanco) Merr. は Philippine の Luzon より Mindanao にかけて廣く分布するが、その葉油は 90~95% の Methylchavicol を含む。³⁾ なお Africa に産し Java 其他にも栽培される *Clausena anisata* (Willd.) Oliv.⁴⁾ の葉油は主成分として 75~89% の Anethol を含む⁵⁾ から、この三者の系統関係は第 1 圖の構造関係によつて示される A, B いづれかである。

第 1 圖



即ちこの関係は母體 \longrightarrow *C. anisum-olens* \longrightarrow *C. anisata*
 \searrow
C. lunulata

又は母體 \longrightarrow *C. anisum-olens* \longrightarrow *C. anisata*
 \searrow
C. lunulata

の進化関係を内部的に示すもので

ある。この際 *C. anisum-olens* と *C. lunulata* との関係は分布よりしても後者即ち *C. anisum-olens* \longrightarrow *C. lunulata* の関係にあるべきものとする。

さてこの台湾に産する *C. lunulata* Hay. は Paiwan 族にては Kyaromata と呼ばれ、Amis にては Kalumata と呼ぶが、⁶⁾ Philippine に産する *C. anisum-olens*

* 通産省大阪工業試験所精油研究室 The Laboratory of Essential Oil, Osaka Industrial Research Institute

Merr. も亦 Tagalog にては Kalomata と稱する。⁷⁾ この事は近似なる植物がバシー海峡をへだてて、異なる然し明かに同系の民族によつて同じ言葉で呼ばれる事を示す甚だ貴重且つ明確なる好例であつて、Philippine より台灣への民族と文化との移動を明示して、その民族學的意義は甚だ大きいものと言う事が出来る。

なおヒメワンプ (*C. lunulata* Hay.) は葉を殺虫に用い、實は食い、根の煎液は發汗に用うるが、恒春下蕃はこの樹の花を男子の頭飾となし、他社に赴くとき同族たる事を示すに用うると言う。其他の種も亦いづれも下熱其他の藥用に供され民族植物としての意義も亦大である。

著者は前報⁸⁾ に於てクスノキ *Cinnamomum camphora* Sieb. の台灣蕃族の稱呼は廣く Rakus 又は Dakus であつて、このものから Ra 又は Da が除かれたものが我クス (Kus) であつてマライ系の匂う意 Raksi に由來する言葉である事を述べ、また古事記にある香木カツラ (Katsura) はその語幹は明かに Katsu であつて、アツシリアの Kasu に連る言葉であり、古來最も有名なる香木肉桂であるべき事を主張した。⁹⁾ これ等の關係はただ時と距離との差以外には實は全く上記 *Clausena lunulata* と *Clausena anisum-olens* との關係と同一であると著者は言いたいのである。

文 献

- 1) Engler: Engler, Prantl; Nat. Pflanzen Fam. (2), 19a: 321 (1931).
- 2) 加福・加藤: 日化誌, 55: 221 (1934).
- 3) Brooks: Phil. Jour. Sci. 6 A: 344 (1911).
- 4) Dalziel: Useful Plants of West Tropical Africa, 307 (1937).
- 5) Meyer: Chem. Abstr. 1948: 325.
- 6) 佐々木: 台灣植物名彙, 250 (1928); 金平: 台灣樹木誌, 311 (1936).
- 7) Merrill: Enum. Philipp. Plants 2: 337 (1923).
Brown: Useful Plants of the Philippines 2: 227 (1941).
- 8) 藤田: 台灣博物學會會報 25: 140, 429 (1935); 小川香料時報, 16, 2月號: 7 (1943).
- 9) 藤田: 小川香料時報, 15, 5月號: 1 (1942); 台灣博物學會會報, 34: 350 (1944); 香料, No. 9: 5 (1949. 11); 本誌, 25: 63 (1950).